北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

指示語の学習指導：志賀直哉「城の崎にて」全指示語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 利晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007291

指示語の学習指導

―志賀直哉「城の崎にて」全指示語―

菅原利晃

はじめに

「城の崎にて」は高等学校の国語の教科書のいわゆる「安定教材」であった。高等学校の小説教材としては、芥川龍之介の「羅生門」の後続として、ひとつの系統的な位置にあった。すなわち、「城の崎にて」はいわば高等学校小説教材の基礎的な教材として配置されていたのである。内容をみても、「羅生門」で学んだ人間の生き方、生のありかたを、ちがった角度から検討しなおすという意味合いもある（注1）。

しかし、このかつての「安定教材」も消えつつある。たとえば試みに、現在、高等学校教科書に「城の崎にて」が採録されているかどうかを調べると、次のようになる（配列は発行者・教科書の番号順）。

国語総合	東京書籍	『新編国語総合』	×
	三省堂	『精選国語総合』	×
		『国語総合現代文編』	×
		『高等学校国語総合改訂版』	×
		『新編国語総合改訂版』	×
	教育出版	『明解国語総合』	×
		『国語総合改訂版』	×
		『新国語総合改訂版』	×
	大修館	『国語総合改訂版』	×
		『新編国語総合改訂版』	×
	数研出版	『国語総合』	◎
	明治書院	『新精選語総合』	×
		『高校生の国語総合』	×
	右文書院	『国語総合』	×
	筑摩書房	『精選国語総合現代文編改訂版』	×
		『国語総合改訂版』	◎
	第一学習社	『高等学校新訂国語総合現代文編』	◎

『高等学校改訂版国語総合』　◎
『高等学校改訂版標準国語総合』　×
『高等学校改訂版新編国語総合』　×
桐原書店　『探求国語総合現代文・表現編改訂版』　×
『展開国語総合改訂版』　×
『発見国語総合』　×
現代文
東京書籍　『現代文2』　×
『新編現代文』　×
『精選現代文』　○
『現代文1』　○
三省堂　『高等学校現代文』　×
『新編現代文』　×
教育出版　『精選現代文』　×
『現代文』　×
大修館　『現代文2』　×
『現代文1』　×
『精選現代文』　×
『新現代文』　×
『新編現代文』　×
数研出版　『現代文』　×
明治書院　『精選現代文2』　×
『精選現代文』　×
『新編現代文』　×

『精選現代文1』　○
右文書院　『新選現代文』　×
『現代文』　×
筑摩書房　『展望現代文』　×
『精選現代文』　×
『新現代文』　×
旺文社　『高等学校現代文』　○
第一学習社　『高等学校版現代文』　×
『高等学校標準現代文』　×
『高等学校新編現代文』　×
桐原書店　『探求現代文』　×
『展開現代文』　×

×…採録なし　◎…全文採録　○…『范の犯罪』の部分を欠くがそれ以外は採録

このように、「城の崎にて」を採録している教科書は少ない。私見によれば、従前の「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」がなくなったため、「国語総合」では「羅生門」と太宰治か現代小説、「現代文」では「山月記」と「舞姫」というような「すみわけ」ができてしまい、「城の崎にて」のはいりこむ余地がなくなってしまったような状況である。また、中には「城の崎にて」を「現代文」で採録したり、「山月記」のあとに置いたりするなど(たとえば、旺文社『高等学校現代文』では「山月記」「こころ」「城の崎にて」の順に採録)、高等学校小説教材の中でも基礎的な教材で

あるという点もくずれつつあるようである。また、「城の崎にて」の一見平易な文体ないし文章が、学習者にとって難解な教材とみなされ、徐々に教科書から消えていってしまったのかもしれない（注2）。すなわち、「生と死」というテーマが生徒にとってなじみのない難解なものであること、加えて指示語をはじめとする読解上の困難さがあることなどの要因によるものである。

さて、「城の崎にて」は、私自身前任校もふくめると四度教えたことになる。この四度の学習指導を通して感じたことは、前述の通り、一見、さしたる難しい用語もなく、構成もとらえやすく、簡明な小説であるかのように思われるが、実際に授業をおこなってみると、その難解さに生徒も尻込みをすることが多いということである。「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。」という考え方に至るまでの難しさもある。省略があったり、指示語があったりして、場合によってはいちいち文脈をたどって、行きつ戻りつしながら読まねばならない箇所も多いのである。「城の崎にて」の学習では、指示語こそが、生徒の読解を困難にするひとつの要因なのだとつくづく感じる。

本稿は、「城の崎にて」の指示語についてまとめたものである。読解上、指示語の指し示す内容の確認という作業は避けられない。その作業を効率的にするためまとめたものである（注3）。

一

いわゆる指示語について、その定義もさることながら、文章中における働きや役割について、従来様々な研究がなされてきた。物語文と評論文とにおける指示語の機能の差異的問題について、あるいは表現内容の類型化について、「こ」「そ」系指示語におけるそれぞれの性質の相違について、視点論との関わりについて、など、その研究には枚挙にいとまがない。しかし、本稿では、これらの諸論にまでは言及するにはいたらない。ただ「城の崎にて」の指示語の指示内容について、その一つ一つを指摘し、まとめるにとどまるだけである。

さて、「城の崎にて」の指示語を考えるにあたって、いくつかの前提がある。まず、次のような語は指示語から除外した。

① 二、三年で出なければ後は心配はいらない、とにかく要心は肝心だからと言われて、それで来た。

② 青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのままで。祖父や母の死骸がわきにある。それももうお互いに何の交渉もなく、――こんなことが思い浮かぶ。それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった。

③ それは三日ほどそのままになっていた。

④ それとも蟻に引かれていくか。

⑤ ある午前、自分は円山川、それからそれの流れ出る日本海などの見える東山公園へ行くつもりで宿を出た。

⑥　それはねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない。で、またそれが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと「あるがまま」で、気分で願うところが、そう実際にすぐは影響はしないものに相違ない、しかも両方が本当で、影響した場合は、それでよく、しない場合でも、それでいいのだと思った。

⑦　もうここらで引きかえそうと思った。

⑧　それほどに差はないような気がした。

①の「それで」は前の状態を受けて、それだから、そういうわけで、の意の接続詞ととらえた。

②の「そのままで」は、もとのまま、今まで通りという意味で使われている語であり、特に指示する内容があるものではない。また「それも」も前に述べたことにさらに別の内容を加える接続詞であり、指示語として働いてはいない。「それほどに」は、そんなに、の意味の語であり、指示する内容はない。

③の「そのままに」は②の「そのままで」と同様である。

④の「それとも」は、あるいは、もしくは、の意味で使われている接続詞とみなした。

⑤の「それから」も、そのつぎに、そして、の意味の接続詞とみなした。

⑥の二箇所ある「そう」は、それほど、の意味の副詞とみなした。従って、指示する内容は特にない。

⑦の「ここらで」は、漠然とした場所を表している。代名詞ではあるが明確な指示内容はない。

⑧の「それほどに」は、思っていたほどに、の意味のことばで指示する内容は特にない。

また、区切り方についても考慮すべき点がある。たとえば、

山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、その後養生に

では、「その」と「後養生」とを区切って考えずに、「その後養生」という一連の語として指示内容をとらえた。また、

それにしろ、それはいかにも静かであった。

の「それにしろ」は「それ」だけをとらえなかった。「それにしろ」のまま指示内容を考えることにした。これは、生徒が指示内容を考える際に、文脈を想起しやすいという点から、このような分け方としたのである。

二

以下、実際の授業で扱った箇所もふくめて、「城の崎にて」の全指示語と各指示内容とを掲げておく。適宜場面によってわけてある。また、指示内容に別解がある場合などは複数記してある。その場合、最初に示したものほど稿者が適切な指示内容と判断したもの、ととらえていただきたい。

山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、[1]その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、[2]そんなことはあるまいと医者に言われた。二、三年で出なければ後は心配はいらない、とにかく要心は肝心だからと言われて、それで来た。三週間以上――我慢できたら五週間くらいいたいものだと考えて来た。

1…山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、そのけがの後養生

2…背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないこと／背中の傷が脊椎カリエスになること

頭はまだ何だかはっきりしない。物忘れが激しくなった。しかし気分は近年になく静まって、落ちついたいい気持ちがしていた。稲の取り入れの始まるころで、気候もよかったのだ。

一人きりでだれも話し相手はない。読むか書くか、ぼんやりと部屋の前のいすに腰かけて山だの往来だのを見ているか、[3]それでなければ散歩で暮らしていた。散歩する所は町から小さい流れについて少しずつ登りになった道にいい所があった。山のすそを回っているあたりの小さなふちになった所にやまめがたくさん集まっている。そしてなおよく見ると、足に毛の生えた大きな川がにが石のようにじっとしているのを見つけることがある。夕方の食事前にはよく[4]この道を歩いてきた。冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡を小さい清い流れについていく時考えることはやはり沈んだことが多かった。寂しい考えだった。しかし[5]それには静かないい気持ちがある。自分はよくけがのことを考えた。一つ間違えば、今ごろは青山の土の下に仰向けになって寝ているところだったなど思う。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのままで。祖父や母の死骸がわきにある。それももうお互いに何の交渉もなく、――[6]こんなことが思い浮かぶ。[7]それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった。いつかは[8]そうなる。[9]それがいつか？――今までは[10]そんなことを思って、[11]その「いつか」を知らず知らず遠い先のことにしていた。しかし今は、[12]それが本当にいつか知れないような気がしてきた。自分は死ぬはずだったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、――中学で習った『ロード・クライブ』という本に、クライブが[13]そう思うことによって激励されることが書いてあった。実は自分も[14]そういうふうに危うかった出来事を感じたかった。[15]そんな気もした。しかし妙に自分の心は静まってしまった。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。

3…読むか書くか、ぼんやりと部屋の前のいすに腰かけて山だの往来だのを見ているか、のいずれか

4…町から小さい流れについて少しずつ登りになった道

5…沈んだこと／寂しい考え／寂しさ

6…死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝ていること

7…死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、

お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝ていること／けがや死についての寂しい考え

8…死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝てしまう（ようになる）／死んで墓の下で横たわる（ことになる）／死ぬ

9…死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝てしまうこと／死んで墓の下で横たわること／死ぬこと

10…いつかは死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝てしまうこと／いつかは死んで墓の下で横たわること／いつかは死ぬこと

11…いつかは死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝てしまう、そのいつか／いつかは死んで墓の下で横たわる、そのいつか／いつかは死ぬ、そのいつか

12…死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝てしまうこと／死んで墓の下で横たわること／死ぬこと

13…自分は死ぬはずだったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、というふうに

14…クライブのように／クライブが思ったように／自分は死ぬはずだったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、というように、自分が助かったことに積極的な意味を感じて激励される、中学で習った『ロード・クライブ』のように

15…自分にはなすべき仕事があるから死なずにすんだのだ、という気持ち／自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、と思い込むことで、危うく助かったことを、神が自分に寄せてくれた祝福、幸運だと思いたい気持ち

自分の部屋は二階で、隣のない、わりに静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁のいすに出た。わきが玄関の屋根で、[16]それが家へ接続する所が羽目になっている。[17]その羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑の大きな太った蜂が天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。蜂は羽目のあわいからすり抜けて出ると、ひとまず玄関の屋根に下りた。[18]そこで羽や触角を前足や後ろ足で丁寧に調えると、少し歩き回るやつもあるが、すぐ細長い羽を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなって飛んでいく。植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけで蜂は[19]それに群がっていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた。

16…玄関の屋根

17…玄関の屋根が家へ接続する所が羽目になっている、その羽目

18…玄関の屋根

19…ちょうど咲きかけの植え込みのやつでの花

ある朝のこと、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がっていた。ほかの蜂はいっこうに冷淡だった。巣の出入りに忙しく[20]そのわきをはい回るがまったく拘泥する様子はなかった。忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きているものという感じを与えた。[21]そのわきに一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所にまったく動かずにうつ向きに転がっているのを見ると、[22]それがまたいかにも死んだものという感じを与えるのだ。[23]それは三日ほどそのままになっていた。[24]それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。ほかの蜂がみんな巣へ入ってしまった日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは寂しかった。しかし、[25]それはいかにも静かだった。

20…玄関の屋根で死んでいる一匹の蜂のわき

21…忙しく立ち働いている蜂のわき

22…朝も昼も夕も、見るたびに一つ所にまったく動かずにうつ向きに転がっている一匹の蜂

23…朝も昼も夕も、見るたびに一つ所にまったく動かずにうつ向きに転がっている一匹の蜂

24…朝も昼も夕も、見るたびに一つ所にまったく動かずにうつ向きに転がっている一匹の蜂／三日ほどそのままになっていた玄関の屋根で死んでいる一匹の蜂

25…ほかの蜂がみんな巣へ入ってしまった日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残った死骸

夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根もきれいに洗われていた。蜂の死骸はもう[26]そこになかった。今も巣の蜂どもは元気に働いているが、死んだ蜂は雨どいを伝って地面へ流し出されたことであろう。足は縮めたまま、触角は顔へこびりついたまま、たぶん泥にまみれてどこかでじっとしていることだろう。外界に[27]それを動かす次の変化が起こるまでは死骸はじっと[28]そこにしているだろう。それとも蟻に引かれていくか。[29]それにしろ、[30]それはいかにも静かであった。せわしくせわしく働いてばかりいた蜂がまったく動くことがなくなったのだから静かである。自分は[31]その静かさに親しみを感じた。自分は『范の犯罪』という短編小説を[32]その少し前に書いた。范という支那人が過去の出来事だった結婚前の妻と自分の友達だった男との関係に対する嫉妬から、そして自身の生理的圧迫も[33]それを助長し、[34]その妻を殺すことを書いた。[35]それは范の気持ちを主にして書いたが、しかし今は范の妻の気持ちを主にし、しまいに殺されて墓の下にいる、[36]その静かさを自分は書きたいと思った。

「殺されたる范の妻」を書こうと思った。[37]それはとうとう書かなかったが、自分には[38]そんな要求が起こっていた。[39]その前からかかっている長編の主人公の考えとは、[40]それはたいへん違ってしまった気持ちだったので弱った。

26…屋根／玄関の屋根／屋根の冷たい瓦の上
27…蜂の死骸
28…死んだ蜂が流し出された地面／泥にまみれてじっとしているどこか
29…死んだ蜂が蟻に引かれていったとしても／外界に蜂の死骸を動かす次の変化が起こったとしても／蜂の死骸が動いたと言っても
30…蜂の死骸
31…せわしくせわしく働いてばかりいた蜂がまったく動くことがなくなった、その静かさ／蜂の死骸の静かさ
32…山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした、その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛ける前／「城の崎にて」を書く前
33…范という支那人の、過去の出来事だった結婚前の妻と自分の友達だった男との関係に対する嫉妬
34…范の妻／自分の妻
35…『范の犯罪』という短編小説
36…しまいに殺されて墓の下にいる、范の妻の死の静かさ
37…「殺されたる范の妻」
38…「殺されたる范の妻」を書こうと思う気持ち／范の妻の気持ちを主にし、しまいに殺されて墓の下にいる、その静かさを自分は書きたいという要求
39…「殺されたる范の妻」を書こうと思う前／山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをする前
40…「殺されたる范の妻」を書こうと思う気持ち／死の静かさに親しみを覚えること

蜂の死骸が流され、自分の眼界から消えて間もない時だった。ある午前、自分は円山川、それから[41]それの流れ出る日本海などの見える東山公園へ行くつもりで宿を出た。「一の湯」の前から小川は往来の真ん中をゆるやかに流れ、円山川へ入る。ある所まで来ると橋だの岸だのに人が立って何か川の中のものを見ながら騒いでいた。[42]それは大きなねずみを川へ投げ込んだのを見ているのだ。ねずみは一生懸命に泳いで逃げようとする。ねずみには首のところに七寸ばかりの魚ぐしが刺し通してあった。頭の上に三寸ほど、のどの下に三寸ほど[43]それが出ている。ねずみは石垣へはい上がろうとする。子供が二、三人、四十くらいの車夫が一人、[44]それへ石を投げる。なかなか当たらない。カチッカチッと石垣に当たって跳ね返った。見物人は大声で笑った。ねずみは石垣の間にようやく前足をかけた。しかし入ろうとすると魚ぐしがすぐにつかえた。そしてまた水へ落ちる。ねずみはどうかして助かろうとしている。顔の表情は人間にわからなかったが動作の表情に、[45]それが一生懸命であることがよくわかった。ねずみはどこかへ逃げ込むことができれば助かると思っているように、長いくしを刺されたまま、また川の真ん中の方へ泳ぎ出た。子供や車夫はますますおもしろがって石を投げた。わきの洗い場の前で餌をあさっていた二、三羽のあひるが石が飛んでくるのでびっくりし、首を伸ばしてきょろ

きょろとした。スポッ、スポッと石が水へ投げ込まれた。あひるは頓狂な顔をして首を伸ばしたまま、鳴きながら、せわしく足を動かして上流の方へ泳いでいった。自分はねずみの最期を見る気がしなかった。ねずみが殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っている様子が妙に頭についた。自分は寂しい嫌な気持ちになった。[46]あれが本当なのだと思った。自分が願っている静かさの前に、[47]ああいう苦しみのあることは恐ろしいことだ。死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでの[48]ああいう動騒は恐ろしいと思った。自殺を知らない動物はいよいよ死に切るまでは[49]あの努力を続けなければならない。今自分に[50]あのねずみのようなことが起こったら自分はどうするだろう。自分はやはりねずみと同じような努力をしはしまいか。自分は自分のけがの場合、[51]それに近い自分になったことを思わないではいられなかった。自分はできるだけのことをしようとした。自分は自身で病院を決めた。[52]それへ行く方法を指定した。もし医者が留守で、行ってすぐに手術の用意ができないと困ると思って電話を先にかけてもらうことなどを頼んだ。半分意識を失った状態で、いちばん大切なことだけによく頭の働いたことは自分でも後から不思議に思ったくらいである。しかも[53]この傷が致命的なものかどうかは自分の問題だった。しかし、致命的のものかどうかを問題としながら、ほとんど死の恐怖に襲われなかったのも自分では不思議であった。「フェータルなものか、どうか？　医者は何といっていた？」[54]こうそばにいた友に聞いた。「フェータルな傷じゃないそうだ。」[55]こう言われた。[56]こう言われると自分はしかし急に元気づいた。興奮から自分は非常に快活になった。フェータルなものだともし聞いたら自分はどうだったろう。[57]その自分はちょっと想像できない。自分は弱ったろう。しかしふだん考えているほど、死の恐怖に自分は襲われなかったろうという気がする。そして[58]そう言われてもなお、自分は助かろうと思い、何かしら努力をしたろうという気がする。[59]それはねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない。で、また[60]それが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと「あるがまま」で、気分で願うところが、そう実際にすぐは影響はしないものに相違ない、しかも両方が本当で、影響した場合は、[61]それでよく、しない場合でも、[62]それでいいのだと思った。[63]それはしかたのないことだ。

41…円山川
42…橋だの岸だのに人が立って何か川の中のものを見ながら騒いでいたこと（理由・事情・真相）
43…七寸ばかりの魚ぐし
44…ねずみ／石垣へはい上がろうとするねずみ
45…ねずみがどうかして助かろうとしていること（意志）
46…（ねずみが殺されまいと、）死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っている様子／死に切るまで生きるための努力を続けなければならないこと
47…（ねずみが殺されまいと、）死ぬに決まった運命を担い

ながら、全力を尽くして逃げ回る苦しみ／死に切るまで生きるための努力を続けなければならない苦しみ

48…（ねずみが殺されまいと、）死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っている様子／死に切るまで生きるための努力を続けなければならないようなこと（動騒）

49…（ねずみが殺されまいと、）死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回る努力／死に切るまで続けなければならない、生きるための努力

50…殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っているねずみ／死に切るまで生きるための努力を続けなければならないねずみ

51…殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っているねずみ／死に切るまで生きるための努力を続けなければならないねずみ／死から逃れるためにねずみと同じような努力をする自分

52…病院／自身で決めた病院

53…山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをしたときに負った傷

54…「フェータルなものか、どうか？　医者は何といっていた？」

55…「フェータルな傷じゃないそうだ。」

56…「フェータルな傷じゃないそうだ。」

57…傷がフェータルなものだと聞いたときの自分

58…フェータルなものだと（いうふうに）

59…助かろうと思い、何かしら努力をすること／フェータルなものだと言われて、助かろうと思い、何かしら努力をする自分

60…傷がフェータルなものだと言われたとき／ねずみのように死ぬに決まった運命を担った状態／（医者から）致命傷で死の宣告を受けること／フェータルなもの／死

61…自分の希望が実際に影響し希望どおりになること／自分の希望が実際に影響した場合

62…自分の希望が実際に影響せず希望どおりにならないこと／自分の希望が実際に影響しない場合

63…影響してもしなくても、いずれの場合であっても、ということ／死に直面したときに、死の恐怖に襲われることなく受け入れることもあるだろうし、またそう感じていたにもかかわらず、やはり生きようとして懸命にあがくかもしれないだろうし、そのいずれにも決めがたいこと／「気分で願うところ」が影響せず、死から逃れようと必死に努力すること

64そんなことがあって、またしばらくして、ある夕方、町から小川に沿うて一人だんだん上へ歩いていった。山陰線のトンネルの前で線路を越すと道幅が狭くなって道も急になる、流れも同様に急になって、人家もまったく見えなくなった。もう帰ろうと思いながら、65あの見える所までというふうに角を一つ

一つ先へ先へと歩いていった。ものがすべて青白く、空気の肌ざわりも冷え冷えとして、もの静かさがかえって何となく自分をそわそわとさせた。大きな桑の木が道端にある。向こうの、道へ差し出した桑の枝で、ある一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。風もなく流れのほかはすべて静寂の中に[66]その葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。自分は不思議に思った。多少怖い気もした。しかし好奇心もあった。自分は下へいって[67]それをしばらく見上げていた。すると風が吹いてきた。[68]そうしたら[69]その動く葉は動かなくなった。原因は知れた。何かで[70]こういう場合を自分はもっと知っていたと思った。

64…魚ぐしの刺さったねずみが、殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回る動騒を目の当たりにしたこと

65…向こうの／現場指示用法

66…ヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いているある一つの葉

67…ヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いているある一つの葉（の様子）／風もなく流れのほかはすべて静寂の中にいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くある一つの葉（の様子）

68…風が吹いてきたら

69…ヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いているある一つの葉／風もなく流れのほかはすべて静寂の中にいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くある一つの葉

70…風もなく流れのほかはすべて静寂の中にいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くある一つの葉を、自分は下へいってしばらく見上げていると風が吹いてきて、その動く葉は動かなくなった、というようなこと（場合）／一枚の葉の孤独や、他の葉とはまったく無関係であることから、生と死とは他者と共有することのできないものだ、というようなこと（場合）

だんだんと薄暗くなってきた。いつまで行っても、先の角はあった。もうここらで引きかえそうと思った。自分は何気なくわきの流れを見た。向こう側の斜めに水から出ている半畳敷きほどの石に黒い小さいものがいた。いもりだ。まだぬれていて、[71]それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、じっとしていた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れている。自分は[72]それを何気なく、しゃがんで見ていた。自分は先ほどいもりは嫌いでなくなった。とかげは多少好きだ。やもりは虫の中でも最も嫌いだ。いもりは好きでも嫌いでもない。十年ほど前によく蘆の湖でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まっているのを見て、自分がいもりだったらたまらないという気をよく起こした。いもりにもし生まれ変わったら自分はどうするだろう、[73]そんなことを考えた。[74]そのころいもりを見ると[75]それが思い浮かぶので、いもりを見ることを嫌った。しかしもう[76]そんなことを考えなくなっていた。自分はいもり

を驚かして水へ入れようと思った。不器用に体を振りながら歩く形が思われた。自分はしゃがんだまま、わきの小まりほどの石を取り上げ、77それを投げてやった。自分は別にいもりをねらわなかった。ねらってもとても当たらないほど、ねらって投げることの下手な自分は78それが当たることなどはまったく考えなかった。石はこツといってから流れに落ちた。石の音と同時にいもりは四寸ほど横へ跳んだように見えた。いもりはしっぽを反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思って見ていた。最初石が当たったとは思わなかった。いもりの反らした尾が自然に静かに下りてきた。するとひじを張ったようにして傾斜に堪えて、前へついていた両の前足の指が内へまくれ込むと、いもりは力なく前へのめってしまった。尾はまったく石についた。もう動かない。いもりは死んでしまった。自分はとんだことをしたと思った。虫を殺すことをよくする自分であるが、79その気がまったくないのに殺してしまったのは自分に妙な嫌な気をさした。もとより自分のしたことではあったがいかにも偶然だった。いもりにとってはまったく不意な死であった。自分はしばらく80そこにしゃがんでいた。いもりと自分だけになったような心持ちがしていもりの身に自分がなって81その心持ちを感じた。かわいそうに思うと同時に、生き物の寂しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかった。いもりは偶然に死んだ。自分は寂しい気持ちになって、ようやく足元の見える道を温泉宿の方に帰ってきた。遠く町外れの灯が見え出した。死んだ蜂はどうなったか。82その後の雨でもう土の下に入ってしまったろう。83あのねずみはどうしたろう。海へ流されて、今ごろは84その水ぶくれのした体をごみと一緒に海岸へでも打ち上げられていることだろう。そして死ななかった自分は今85こうして歩いている。86そう思った。自分は87それに対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際喜びの感じはわき上がってはこなかった。生きていることと死んでしまっていることと、88それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かった。視覚は遠い灯を感ずるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだった。ただ頭だけが勝手に働く。89それがいっそう90そういう気分に自分を誘っていった。

71…いもり

72…いもり／いもりの体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れていること

73…いもりにもし生まれ変わったら自分はどうするだろう、ということ

74…十年ほど前によく蘆の湖でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まっているのを見たころ

75…十年ほど前によく蘆の湖でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まっていたこと（様子）／いもりにもし生まれ変わったら自分はどうするだろう、ということ（考え）／蘆の湖での体験／いもりの様子

76…いもりにもし生まれ変わったら自分はどうするだろう、ということ（考え）／いもりを見るのを嫌うこと

77…わきの小まりほどの石
78…わきの小まりほどの石／自分が投げてやった石
79…いもりを殺そうという気持ち（意向・意志）／虫を殺すつもり
80…いもりの死んだ場所
81…死んだときの気持ち
82…蜂が死んだ後／雨どいを伝って地面へ流し出された後
83…魚ぐしの刺さったまま、殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っていたねずみ
84…ねずみの水ぶくれのした体／海へ流されて、今ごろは水ぶくれのしたねずみの体
85…町から小川に沿うて一人だんだん上へ歩いていき、ようやく足元の見える道を温泉宿の方に帰ってきて、ということ／自分が死なずに歩いて、ということ
86…（蜂やねずみが死んだのに対して、）死ななかった自分が今こうして歩いていること（内容）
87…（蜂やねずみが死んだのに対して、）自分は死なずに今こうして歩いていられるということ（内容）
88…生きていることと死んでしまっていることと
89…視覚は遠い灯を感ずるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだった。ただ頭だけが勝手に働く、ということ（状態）
90…生きていることと死んでしまっていることとは両極ではなく、それほどに差はない、というような気分（考え）
91…ここを去った。それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。
91…（但馬の）城崎温泉
92…城崎温泉でけがの治療をし三週間した時期／（但馬の）城崎温泉を去ったとき

三

「城の崎にて」の指示語について、実際の授業で気がついた点、学習指導上ポイントとなるような点をいくつかあげてみる（注4）。

まず、指示内容をまとめる際に、当該箇所の文章の順序をかえるという点である。たとえば、

植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけで蜂はそれに群がっていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた。

の19「それ」の指示内容について、「ちょうど咲きかけの植え込みのやつでの花」と名詞で終わるようにまとめたものである。これは直前の「植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけで」の部分を利用したものである。これには、単純に「もの」を付け加えて、「植え込みのやつでの花がちょうど咲きかけであるもの」とか、さらに「が」を「で」にかえ、「咲きかけで」を「咲きかけのもの」とかえた「植え込みのやつでの花でちょうど咲

きかけのもの」などのまとめ方もある。しかし、「花」という名詞があるので、これを末に置いてまとめるという方法をとった。

次に、指示内容を考える際に、ことばを補ってまとめるという点である。たとえば、

一つ間違えば、今ごろは青山の土の下に仰向けになって寝ているところだったなど思う。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の傷もそのままで。祖父や母の死骸がわきにある。それももうお互いに何の交渉もなく、——[6]こんなことが思い浮かぶ。

6「こんなこと」では、「死んでしまって」という語を補い、さらに直前の箇所のことばを少々かえて、「死んでしまって、青山の墓地で祖父や母の死骸のわきで、お互いに何の交渉もなく仰向けになって寝ていること」とした。この「死んでしまって」と言う語はこの箇所の前提となる語で、補わなくても指示内容は指摘できるはずである。しかし、単純に「仰向けになって寝ている」という言葉では死んでいることの直接的な説明にはならない。そこで、よりくわしく指示内容をあきらかにするために補ったものである。

また、前述内容全体を指し示す場合もある。この場合、何（誰）が、どうした（どうなった）のか、その状況をくわしくまとめあげるように指導した。たとえば、

[64]そんなことがあって、またしばらくして、ある夕方、町から小川に沿うて一人だんだん上へ歩いていった。山陰線のトンネルの前で線路を越すと道幅が狭くなって道も急になる、流れも同様に急になって、人家もまったく見えなくなった。

の64「そんなこと」では、場面がかわったことをふまえて、前段までのねずみの様子をまとめるように指導した。「魚ぐしの刺さったねずみが、殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回る動騒を目の当たりにしたこと」というまとめとした。死ぬに決まった運命を担いながら全力で逃げ回るという点をはずさないようまとめることを確認させた。

また、指示内容をどれだけくわしく答えるべきかという問題もある。たとえば、

向こう側の斜めに水から出ている半畳敷きほどの石に黒い小さいものがいた。いもりだ。まだぬれていて、[71]それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、じっとしていた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れている。自分は[72]それを何気なく、しゃがんで見ていた。

の71「それ」は直前の名詞である「いもり」を指し示すことは生徒も容易に指摘できた。しかし、72「それ」については、71「それ」と同じものをさすのだから「いもり」でよいとする考

えと、それまでの表現を利用して「いもりの体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れていること」とする考えとがあった。ほかにも「いもりのいい色」「じっとしているいもり」などの考えもあり、簡単な表現ながら多様な答えが実際の授業では出てきた。指示語は、あくまで簡潔なまとめの表現であり、あまりくどくどと長たらしく指示内容を指摘すべきではないという考えから、授業では単純に「いもり」とした。そもそも、指示語の指示内容を考える際に、その内容は極力簡潔にすべきではないかと考えさせられる表現である。指示語をいちいち考慮しながら読み進めるという作業自体もはたして本当に有益なことなのか、われわれが文章を読む際に指示語の指示内容をそれほど厳密にはとらえずに読み進めているのではないか、など考えるべき点が多い。

繰り返すが、「城の崎にて」は相当の読解力を要する教材である。特に、指示内容がはっきりとわからない場合がある。たとえば、

で、また60それが今来たらどうかと思ってみて、なおかつ、あまり変わらない自分であろうと思うと「あるがまま」で、気分で願うところが、そう実際にすぐは影響はしないものに相違ない、しかも両方が本当で、影響した場合は、61それでよく、しない場合でも、62それでいいのだと思った。63それはしかたのないことだ。

の60「それ」について、実際の授業で指示内容を考えさせたところ、様々な答えがあった。「傷がフェータルなものだと言われたとき」「ねずみのように死ぬに決まった運命を担った状態」「(医者から)致命傷で死の宣告を受けること」「フェータルなもの」「死」などと、直前の語句を用いたまとめ方や、単に「死」とするものまで様々であった(注5)。また、63「それ」についても、「影響してもしなくても、いずれの場合であっても、ということ」や、「死に直面したときに、死の恐怖に襲われることなく受け入れることもあるだろうし、またそう感じていたにもかかわらず、やはり生きようとして懸命にあがくかもしれないだろうし、そのいずれにも決めがたいこと」という考えと、「『気分で願うところ』が影響せず、死から逃れようと必死に努力すること」という考えとの大きく二つの答えがあった(注6)。特に、このあたりの文章は、主題に関連する重要なところである。しかし、実際の授業では、指示語が多い上に、抽象的な内容でありひどく難解で、生徒もかなり読解に苦労するところでもある。一つ一つの指示語をおさえさせ、別の考え方がある場合には、それもいちいち確認させて、読み進めた。相当の読解力を要する部分である(注7)。

おわりに

「城の崎にて」は指示語の学習指導に格好の教材である。指示内容も簡潔なものがあったり、まとめ方を工夫するものがあるなど、文章読解をすすめる上で生徒の適度の読解力・表現力

をのばすのに適切な教材である。

しかし、その一方、多様な答えがある指示語や、抽象的な内容で読解が難しい指示語もある。このようなところは、主題にかかわる部分が多いので、避けて通るわけにはいかない。むしろじっくりと読解をすすめ、主題の把握に向かわせたいものである（注8）。

なお、実際の指導では、教科書そのままには書き込みが無理なので、事前に本文すべてをノートや原稿用紙等に、行間をあけて書写（できれば筆ペン）したものを用意させ、毎回の授業では随時指示内容を横に書きこみさせるようにした。生徒は矢印を使ったり、補入記号を使って「こと」などの語を入れたり、様々に工夫を凝らしていたようである。このように指示語をいちいち確認した上で、読解をすすめる形をとった。

本文に真正面から取り組み、本文をじっくり読むことこそが、読解指導では必要なことと感じるものである。さらなる工夫を試みたい。

注

（1）試みに、従前の、明治書院『精選新国語Ⅰ』（平成八年三月）の指導書『表現の手引き』によると、「城の崎にて」の「単元のねらい」に「小説（一）の『羅生門』『ボート』を受けて、」取り上げたとあり、「簡潔で明晰な文章で表された、生と死の問題も考えられるようにした」とある。

（2）ここで、一見平易な文体ないし文章としたのは、注（1）の通りであるが、他にもたとえば、文体に関しては、小林英夫氏「文体論から見た志賀直哉」（『志賀直哉研究』河出書房・昭和十九年六月）では「まづ志賀氏のすべての文章について、誰にも即座に気付かれる特色は、それがごく短い、ぽつり〳〵と切れた単文の集積から出来てゐるといふことである。」とある。また、吉田熙生氏「志賀直哉のあの文体はどうして生まれたか」（『国文学』昭和五十三年九月）には「その表現の平明簡潔さ、即物性、にもかかわらず短い修飾による、あるいは短い文の組み合わせによる、効果的な主観の伝達、そして白樺派に共通する「自分」という独得な一人称の用法、――これが形態的に見た時の志賀の文体の特色である。」とある。また、下岡友加氏『志賀直哉の方法』（平成十九年二月・笠間書院）では、志賀直哉の評価について「現代でも簡潔で的確な日本語表現の規範として、志賀の小説の一節はしばしば召喚されている。…ただ、そのあたかも自明であるかのような志賀の表現力が小説の文脈のなかで、如何なる必要性に基づき生み出された記述の集合体、配列、機構であるか、我々はどれだけ正確に知っているだろうか。」という指摘もある。

（3）なお、本文の引用は、筑摩書房『国語総合改訂版』によった。また、指示内容に関しては、筑摩書房『国語総合学習指導の研究』のほか、明治書院、東京書籍などの

各指導書・発問集を参照した。

（4）　指示語の指導については多くの論がある。たとえば、岡崎晃一氏「『トロッコ』の指示語（二）――文脈指示の分析――」（『解釈』三十一―七号・昭和六十年七月）には、「学習指導上の留意点」として、「2指示される語句を指示語に代入する際、変形を要する場合がある。」「5先行文の大部分を指示することも少なくなく、語順を変えたり、文末を体言化したりする必要がある。」などをあげている。また、牧恵子氏「『注文の多い料理店』の表現研究――指示語に注目して――」（『国語科教育』第三十八号・平成三年三月）には、「『指示語』指導の整理」として、小・中学校の現行の教科書をもとにして、「本文の指示語を取り上げ、その代行内容を問う。」「本文の指示語を取り上げ、気をつけて読むことを指導する。」「代行機能だけでなく、限定機能にも注意させる。」「本文の指示語を取り上げ、主題の深まりと関連させる。」「指示語だけでなく、接続語も含めて指導する。」などをあげている。さらに、金城ふみ子氏「指示詞の理解についての一考察」（『講座日本語教育』三十一・平成八年三月）では、「城の崎にて」の「学習者の理解の問題点」をあげ、たとえば、「回答例に見られる現象」として「6原文の部分をそのまま指示対象としている。」、その「考えられる原因」として「名詞化するのを忘れている。」、同様に「7指示対象の範囲が広すぎる。」「書き手の指示の仕方に問題がある。読み手の側に問題がある。」などの諸点を指摘している。なお、この論は外国人に対する日本語教育としてのものである。

（5）　[60]それについて、須藤松雄氏は、『近代文学鑑賞講座第十巻　志賀直哉』（角川書店・昭和四十二年三月）の注釈で、「『それが』は、『フェータルなものだと若し聞いたら……』などを受けている。のがれえぬ死を宣言されるようなことが、の意。」としている。また、遠藤祐氏は『日本近代文学大系　第三十一巻　志賀直哉集』（角川書店・昭和四十六年一月）で「この『それ』は、意味がやや明確でない。自分が怪我をした場合について仮定する、傷が致命的だといわれた事態をさすものか。」としている。

（6）　（5）の遠藤祐氏の前掲書には、「初出にはない。直哉はここで生死の矛盾を、矛盾のままにつき放して、無理に解決しようとしていない。」とある。

（7）　（4）の金城ふみ子氏の前掲論文では、「それ」の用法の分析として、[60]それを「死（話題）」、[61]それを「そ（＝影響した場合）の結果」、[62]それを「そ（＝影響しない場合）の結果」、[63]それを「そ（#29および#30）の結果」と指摘している（#29、#30は、本稿の61、62に該当する）。

（8）　たとえば、山碕雄一氏「『城の崎にて』実践報告」（『月刊国語教育』第四巻第五号・昭和五十九年八月）に、「発

問プリント」を指導者と生徒との間の合議によって作成し、授業を運営していく実践報告がある。それによると、「（ア）主題に直接つながってくる『まとめ』に必要な発問と、（イ）指示語の内容など細部にわたる発問」の二つからなっている。指示語に着目した実践報告である。